



▲カラクサケマン、セイヨウエンゴサク、ニセカラクサケマンの葉と花序の比較('09.4.5, 箕面市 栽培)
左からカラクサケマン、セイヨウエンゴサク、ニセカラクサケマン

ニセカラクサケマン 【ケシ科】

Fumaria capreolata L.

(E) white ramping-fumitory

地中海沿岸原産で、北アメリカやオーストラリアにも帰化している越年生草本。茎は斜上し、途中で分岐し、葉の軸で他物に巻き付き半つるの性となり、1mほど伸びる。葉は互生し、3回羽状に深裂し、長さ10～20cmで、多数の小葉に分かれる。小葉は黄緑色で白味を帯びず、1～4裂からさらに細裂し、長さ1.5～2cm、幅0.6～1.3cmになる。春に、上部の葉腋から伸びた花柄に総状花序を出し、黄白色または白色で、先端部のみ濃紫紅色となる花を着ける。ガク片は花の下方に着き、卵形で縁に鋸歯があり、長さ0.4cmほどで、花卉の1/2の長さとなる。花卉は細長く、基

部に距を持ち、長さ10～15mmである。果実は球形で、熟すと果柄が下方に曲がる。1987年、沖縄県石川市(現、うるま市)で採集され、和名が与えられた。わが国には、この属が数種帰化しており、同定が難しいグループである。

■カラクサケマンとニセカラクサケマンの比較
カラクサケマンの葉は3回羽状に浅裂～深裂し粉白色を帯びる。ニセカラクサケマンの葉は3回羽状に深裂し黄緑色で白味を帯びない(上記写真参照)。

(注) 日本帰化植物写真図鑑(第1巻)の80頁のカラクサケマンの写真は、ニセカラクサケマンの写真でした。

【文献】 521p

【分布情報】 静岡(杉野孝雄 2008: 静岡県の帰化植物—静岡県の外来植物の侵入と分布—、富士常葉大学附属環境防災研究所)